様　式　Ｆ－７－１

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実施状況報告書（研究実施状況報告書）（平成２６年度）

1．機関番号　4 2 6 7 6

2．研究機関名　大妻女子大学短期大学部

3．研究種目名　挑戦的萌芽研究

4．補助事業期間　平成２６年度～平成２８年度

5．課題番号　2 6 5 8 0 0 4 7

6．研究課題名　欧米並びにアジアとの比較を介した日本近代文学及び映画における死の表象の再構築

7．研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
0 0 3 4 1 9 2 5	キドノ　トモユキ 城殿　智行	国文科	教授

8．研究分担者

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名

9．研究実績の概要

研究実施計画に基づき、死生学に関連する表象理論の構築に努めるとともに、日本および各国における映像および言語資料の収集と分析を行った。また、両者を結びつける形で、関連する内容の一部分を、「見えない傍観者　―溝口健二と「あまりに人間的な」映画」と題して公表した。日本近代における表象システムの1つの転換期と見なしうる、１９３０年代の代表的な映画作品『残菊物語』および『元禄忠臣蔵』を主要な対象として、欧米における溝口健二論の定型を形づくっていた、「黙説法」の評価を中心とする解釈に根本的な批判を加えることで、認知理論にもとづく映像分析方法に異議を唱え、また一方では従来の精神分析的な映像解釈を読みかえた。たとえばＤ・ボードウェルやＤ・デイヴィスは、溝口が１９３０年代に作り上げたスタイルを、きわめて「日本的」な表象様式であると高く評価しているが、被写体の直視を映像表象の規範として前提する彼らの解釈は、典型的なエクゾティスムであると指摘されるべきであり、そもそも映像とは、表象されえない要素との関連においてのみ、実定的な意味をになうのではないかという発想を、根本的に欠落させている。そのような認識上の欠落こそが、むしろ決して直視しえないもの、つまりは死そのものから視線を逸らして、それを代替する散漫なイメージのみを量産する（ハリウッド）映画製作を可能にしているのではないかとも敷衍しうる。したがって、溝口健二監督作品を本研究課題の事例として取り上げ、また殊に１９３０年代作品に焦点を当てた本年度の研究実績は、今後の研究全体の推進にとって、核となる意義があったと考える。

（注）・印刷に当たっては、Ａ４判（縦長）・両面印刷すること。